

「一 一人という小人数だったことと、似たような立
場という気楽さがあつたためか、ある校長が打
ち明け話を始めた。」

「私がメンタルやられちゃいましたね。」

必要な相談が終わつたのを汐に雑談が始まり、コ
ロナによる学校休業措置がとられてどうのこうのとポツ
リポツリ話していたら、急に自分の話を始めたのだ。

その人とは顔見知り程度で、ほとんど話したこと
もない。そんなふうにいささか無防備に話し始めること
に驚いたが、口調はからつとしていいるし、隠すよりは
積極的に聞いてもらおうという意志さえ感じられた。

心身の不調など、さつさと開示して客観視した方が
よっぽど得だということか。

休業は一月半にも及んだが、一部の児童は学校で預
かりをせねばならなかつたこともあつて、勤務はいつ
もと変わらなかつた。在宅勤務や年休取得、短時間勤
務などで密を避けという通知があつたが、だれもがそ
の通りにできるはずもなく、管理的な立場の者は、
ずつと学校に詰めておくほかなかつた。

「とはいえ、特にすることはなく、職員室に行つて先
生たちと話すと言つても邪魔になるだろうし、一人で
校長室にいるわけです。そうすると心に隙ができるの
かなあ。」

普通の日常ならば、次々と処理していかなければな
らない仕事に加え、子どもや保護者由来の突発的なア
クシデントに常に見舞われる。振り回されるのが常な
のだが、まったくもって静寂な時間をただ送るとなる
とその異常さに心が変調を来したらしいのである。
様々な不安が心を満たしていったという。

聞いていたもう一人の校長は、自分も全く同じだつ
たと言ひ、心の内を話せることの感謝とともに、
「その心の隙に過去が襲いかかつてきました。」

と語り始めた。かつて自分のとつた判断や対応を心な
らずも思い出して煩悶してしまつたのだそうだ。

「今さらどうなるものでもないことは、分かっている
のに止められないのです。」

初めに打ち明けた校長は、別に一人電話で話したそ
うだが、ここでも強い共感を相手から得たという。

「おそらく、かなりの割合で同じような経験をしてい
るでしょうね。」

二人の意見は一致した。校長室という個室ではな
く、大部屋住人のぼくには、「分かります。」などと
軽々しく応じるのは憚られ、黙つてうなづく程度だつ
たが、コロナに関してはかなり恵まれていた島根でさ
え、けっこうな重量の苦労話ではある。ここからの回
復に、これから人は何を求め始めるのだろうか。



専門ババ奮闘記 (その2) 11

木幡智恵美

小旅行 (6)

あと五分で五時。搭乗手続きしなくては、飛行機に乗り遅れてしまう。娘
ときたら、寛大と実歩を連れて、「ちよつとパン買ってこよう」と言つて、私
に荷物を預けたまま帰つてこないのだ。時間に急がされ、大荷物を抱えて搭
乗手続きをする場所に移動する。列に並んだ途端、「どこにいる？」のメー
ルが入る。実歩と手をつなぎ、もう片手に溶けたアイスを持った娘がその直
後に現れた。「時間ないよ」と言いながら、垂れそうなアイスを受け取る。
アイスなんて買っている場合じゃないのに。「寛大と実歩がパンを選ぶのに
時間がかかつて」と娘。その時、放送が入った。出雲縁結び空港行きは二十
五分遅れとなったとのこと。体中の力が抜けると同時に、呑気な娘への苛立
ちも治まってきた。

手続きを済ませ、待合の椅子に腰かける。もうすぐ旅行は終わり。今朝で
葉は切れたけど、だるいながら何とかここまで体調が保てている。明日から
は、横になるなり、寝込むなり、どうなつてもいい。

寛大や実歩がいたから、生まれて初めて上野動物園の見学をし、パンダま
で見ることができた。日頃の雑事を忘れ、叔父や叔母、従弟夫婦、ルークと
まつたりした時間を過ごせた。今日は、お昼を作らせてもらった。叔母の
家の冷蔵庫の中は宝の箱のようで、幾通りも料理ができる食材が入つてい
て、見るだけでわくわくした。「この肉、使つてくれない」と叔母が生姜焼
き用の肉を手渡さなければ、メニューを決めるのに迷いに迷つていただろ
う。生姜焼きにサラダを作り、叔母夫婦と娘たち母子と一緒に食べた。

隣に座る寛大と実歩は、道の駅で買った腕時計をはめている。
「ルークと友だちになつた」寛大、「ゾウがパオウつていった」と感動を口
にする実歩。二人とも、この小旅行で新たな一步を踏み出したようだ。娘は
昨夕、大学時代の友だちの訪問も受けた。みんなにとって、満足のいく旅行
だったのだ。

30代フリーター やあ、ジイさん。創刊50周年を迎えた女性誌『anan』の歩みを朝日新聞が振り返っていた(6月9日朝刊)。

年金生活者 今の若い女性の求める幸福は老人の求める幸福に似てきているのではないか。読んで、そんな感想を持った。

「女性の欲望を先取りし」「時代の新しい風を届け」「新たな自分を発見せよとハッパをかけ」「女性の性の主体性を軽やかに問いかけ」てきたが、「そうしたエッジの立つた企画は90年代に入ると徐々に姿を消していく」と、雑誌の半世紀の記事は総括している。

22代目になる現編集長は今の誌面作りを「生活の楽しみ系」路線と呼び、「幸福の形が揺らぐ時代、日々の暮らしの中で、信頼できる人と一緒に、気持ちのいいことやときめきを見つけた。そんな女性たちの願いに寄り添っています」と語る。

この「女性たちの願い」は吉本隆明

もまたそれと似た推移をたどってきた。高度経済成長期を青壮年期にたてるなら、現在は老年期にたとえることができる。

30代 ジイさんの毎日も平穏なわけだ。

年金 加齢とともに、痛みと怒りが心の中に占める割合が大きくなっている気がする。喜怒哀楽のうち喜や哀や楽が後退し、怒が痛と手を携えて前に出てきた感じだ。痛いから怒り、怒るとその反作用でまた痛くなる。喜んで、楽しんで、悲しんだりすることの方へ感情を転換するのが難しくなっている。これは乳児への退行を意味しているのではないか。

私の想像では、新生児が最初に覚える感覚は痛みであり、最初に持つ感情は怒りだ。産声はそうした感覚と感情の表出にほかならない。母胎の楽園を追われ、荒野のような世界に生まれ落ちた痛みと、その理不尽さへの怒りだ。やがて痛みは感情の痛みに拡張される。

が『幸福論』で語った、老人の求める幸福と重なる。「例えばおじいさんから、今日は孫が遊びに来て、孫と遊んでたら気分が少しよくなったなんていうことでも、それを幸福と決めちゃう」

今の若い女性たちが年寄りじみていくというのではない。私たちの社会が老年期を迎えているということだ。富の稀少性の縮減が人びとの欲望を切迫したものから余裕のあるものに変えた結果をそこに見ることができる。

30代 欲望が衰えたということだな。年金 若いときの欲望は飢餓感が大きく、そのぶん、満たされたときの快感も大きい。加齢とともにどちらも小さくなっていく。

緊張あるいは興奮が生じると、それを解消しようとする心の傾向をフロイトは快感原則と呼んだ。緊張、興奮は心の平衡状態からの逸脱を意味し、逸脱が大きければ大きいほど、飢餓感が増し、満たされたときの快感も増す。

平衡状態にある心の原型は胎児だ。

老化によって痛みと怒りが主流となった感情は、変化の幅が狭まったぶんだけ柔軟さを欠く。年を取ると、つまりいたり、すべったりして転んだとき、柔道の受け身に相当する動作をすることができなくなるように、心も受け身ができなくなる。

30代 やつかいだな。年金 崩れかける心のバランスをなんとか保つことができているのは、間近に迫りつつあるおのれの死を勘定に入れないながら日々を送るくせがついているからかもしれない。

快感原則は母胎に帰りたいという願望を駆動力としている。飢餓感が強ければ強いほど、言い換えれば平衡状態からの逸脱が大きければ大きいほど、母胎への帰還願望も強まる。それはもともと充足不可能な願望なので、強まれば強まるほど、それを満たそうとする行動は生存の危険をとまなう。

それを避ける作用としてフロイトは現実原則を想定した。快感原則に従うのをあきらめたり、先送りしたりする作用だ。若いときは平衡状態からの逸脱が大きいぶん、そのリスクを回避する現実原則の作用も強まる。若い男性のほとんどが性欲を満たすためにすることは、すぐに女性と性交しようとすることではなく、せつせとカネを稼ぐなどして、女性を惹きつけようとすることだ。

年を取り、性欲が弱まると、そうした現実原則にもとづく迂回作業も次第に必要ななくなり、それをやる力も減退していく。カネを稼ぐことよりも、孫と遊ぶことに関心が向く。近代の社会

断捨離とか終活はそうしたくせの集中的なあらわれだろう。自分の死を勘定に入れながら生活するということは、死からの視線を行使しながら、何かを判断したり、行ったりすることを意味する。

生きることは個別的な動作の連続だ。その否定である死は普遍性への移行とみなすことができる。人はそこからおのれの生を俯瞰する。痛みと怒りに多くを占められた心もまたその視線によって相対化され、バランスを取り戻す。

死からの視線は普遍的な、ユニバーサルな視線であり、宇宙的な視線といふことができる。この視線を日常的に行使しているのは老人ばかりではない。乳児も同様と想定される。少し前まで母胎という宇宙と一体で、自分自身が宇宙でもあった胎児の時代の視線を乳児は名残として持っている。痛みと怒りを泣き声で表出し続ける乳児が心のバランスを崩さないでいられるのは、それがあからだ。

ニュース日記 743
中村 礼治

欲望の年齢